

31 最重症の Early Childhood Caries に治療とフォローを

おこなった一症例

○佐々木明彦 エンゼル歯科

諸言

低年齢児のう蝕発症の背景に長期授乳等の生活習慣と砂糖の摂取の両者があることを示唆する報告¹⁾もあるが、いまだその成立機序の詳細は解明されていない。中でも低年齢の重症う蝕 (Early Childhood Caries 以下 E.C.C.) は、小児う蝕が減少した現在でも深刻な症例も散見され、小児歯科専門医等の臨床現場では早急な対応を余儀なくされることも少なくない。

極めて低年齢で最重症と思われる E.C.C. に対するう蝕治療とその後のフォローを経験したのでケースプレゼンテーションとして報告する。なお、本プレゼンテーションの内容及び写真の使用については患児の保護者の承諾を得ている。

症例

患児：初診時 (2010年5月10日) 年齢1歳1か月の女兒。

主訴：A部歯肉及び上口唇の腫脹。

口腔内所見：萌出歯

DCBA	ABCD
DCBA	ABCD

萌出歯は全て萌出途上であったが BA|AB の歯冠はスポンジ状に崩壊し、A部歯肉に長径 10 mm 大の歯肉膿瘍を認め Aは膿瘍に圧されて口蓋側に転移していた。また、上口唇には中等度の腫脹及び発赤がみられた。

診断：母親への問診から母乳授乳の合い間に哺乳瓶によるリンゴジュースの常飲もあることがわかり、生活習慣を背景とした重症の E.C.C. (BA|AB の慢性根尖性歯周炎) と診断した。

治療：抗生剤投与、消炎後、年齢的に歯根未完成と思われたが切歯部のフロス結紮のみによるラバーダム防湿下で通法に準じて BA|AB に対する感染根管治療をおこなった。

母親が多忙で来院が途絶えがちであったため、初診時から約4か月後 (2010年9月17日) になって水酸化カルシウム製剤 Vitapex® にて根管充填後ピド・フォームクラウンを用いて CR による歯冠修復を実施した。

経過：歯冠修復完了後に母親への T.B.I. をおこなって経過観察に入った。

本児の弟に対し居住する自治体の健康部門から保健師、歯科衛生士による子育てに関するフォローが入ったため、その後来院した弟も含め自治体職員とも連携して受診勧奨をおこなったこともあり、定期的なリコールには応じないものの断続的な来院があった。5歳までに乳臼歯のフィッシャーシーラントや、う蝕に罹患した乳臼歯及び下顎乳前歯の CR 修復も実施した。

2歳以降もう蝕多発傾向は続いたが、BA|AB 以外のう蝕は比較的軽度で、結果として BA|AB のみが極めて低年齢で重症の E.C.C. に罹患したことになる。

3歳10か月時 (2013年2月19日) に上顎前歯部の X 線撮影をおこなった。A|A に歯根吸収が認められるが BA|AB いずれにも動揺もなく、臨床的には経過は良好と思われた。

4歳2か月時 (2013年6月15日) 転倒による外傷のため来院。A|A は歯槽窩より挺出して著しい動揺を認め、不完全脱臼と診断された。A|AB 部歯肉に裂創がみられた。ピド・フォームクラウンの脱落、歯冠破折は |B のみであった。歯肉縫合、歯牙に対する暫間固定及び投薬をおこなった。|B は消炎後に再修復を実施した。

5歳7か月時 (2014年11月8日) に A|A は交換期のため抜歯となった。

結果：6歳0か月 (2015年4月24日) 来院時には叢生はあるが 1|1 の萌出を認め、歯冠の色調と形態は正常で A|A の E.C.C. 及び外傷の影響はないものと考えられた。

考察：低年齢での治療に踏み切らざるを得なかった本症例は幸い比較的良好に経過した。

E.C.C. は様々な生活背景の中で、今でも時代から取り残されたかのように発症し、ケースに応じて適切な時期に的確な処置、治療をおこなう必要がある。しかし、日本小児歯科学会も課題とする「小児歯科標榜医は増加しても大多数は学会員ではない」という現状が続けば、E.C.C. に対応できる歯科医療機関の減少が危惧される。

「むし歯の洪水」は終息したが、近年は小児歯科専門医・認定医など対応力のある数少ない歯科医療機関に地域の重症う蝕の患児が一極集中するという言うなれば「むし歯の集中豪雨」とでも呼ぶべき現象が起きつつあり、対策が待望される。

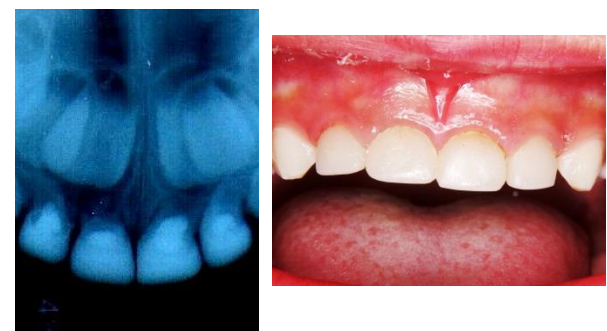
参考文献：1) Pamela R Erickson, DDS, PhD : "Investigation of the role of human breastmilk in caries development" Pediatric Dentistry 21(2): 86-90, 1999



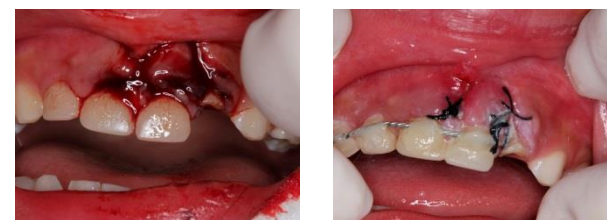
初診時 (1歳1か月) の上顎前歯部



歯冠修復後 (1歳7か月) の上顎前歯部



3歳11か月時の X 線写真と上顎前歯部



外傷受傷時 (左) と処置後 (受傷2日後)



6歳0か月時の上顎前歯部